

# 「浮世物語」の論理と構成

谷 たに 脇 わき 理 まさ 史 ちか

## 〔一〕 序 章

ある一つの作品を浮世草子と呼んだり、洒落本と呼んだりすれば、そのいくつかを読んでいる我々は、ある程度までその作品の素材・内容・文体、時には書型や冊数までも頭にうかべることが出来るであろう。しかし、ある作品が仮名草子だと規定されたとしても、その作品を読んでいる者には、ほとんどその作品の具体的な様相を思いうかべることは出来ず、その内容・文体を予測することなどは不可能に近い。ということは、時に便宜的と評される近世小説史の用語の中でも、仮名草子という言葉は、最もアイマイな概念規定しかほどこされていないことを意味する。と同時に、仮名草子という名で現在呼ばれている作品群が、一つの範型に統一されてはおらず、雑多で未分化な性格を持つ個々の作品の集積にすぎないということもある。

云うまでもなく、仮名草子という言葉は、中世小説と近世小説の中間項の位置を占める小説的な作品群を登録するために用いられており、西鶴以前に登場した近世初期の小説群をばくせん<sup>1</sup>と指している。しかし、

現在仮名草子と認定されているものの中に、小説と呼ぶのを躊躇させる

ようなものがかかなり多いことも確かであるから、仮名草子という言葉は、近世初期の小説群というより、むしろ当時行なわれていた散文作品の総称と云った方が正しいかもしれない。もちろん、多くの小説とは呼びにくい作品群までも、厳密な識別を行なうことなく仮名草子という名称でくっってしまう従来のやり方は、余りに便宜的であり、当然この便宜主義は批判されなければならないが、<sup>(註1)</sup>仮に非小説的という理由からいくつかの作品をふるいにかけても、小説という形式があらゆる要素をとり込むことの出来るルーズな形式である以上、仮名草子という小説は、依然雑多な作品群であることに変わりはないであろう。従って、仮名草子という言葉によって個々の作品の性格を具体的につかむことが出来ないとするれば、個々の作品をみきわめるためには「…的仮名草子」又は「仮名草子…物」という型で規定せざるを得ないということになり、作品の分類・整理が行なわれることになる。

確かに、雑多な作品群を総合的に理解して行くための方法として、分

類という手段は有効であろう。細分化され、系統立てられた分類表を作り上げることは、一見学問的な体系を志向しているがごくくでもある。しかし、分類という型で行なわれる作品の性格規定が本質的な意味で有効性を持つのは、あくまでもその作品を全体的にとらえた時であって、その作品の持つ多様性のいくつかを切り捨てることによって体系を立てるのは、如何にそれが精緻な体系であっても、有効性を主張することは出来ない。その意味で、現在まで続けられ仮名草子研究の主流をしめることになっていく分類整理が、果して、どの程度の有効性を發揮しうるかには、まだ多くの問題が残っていると云えそうである。

例えば、「可笑記」という作品の場合、普通には仮名草子教訓ものというレッテルをはられて登録される。しかし、このような分類の作業を行なうことによって、「可笑記」を教訓的な要素を持つだけの作品と規定してしまうとすれば、「可笑記」の作者が書いている随筆的（あるいは随想的）な部分も、読者をひきつける自伝的部分も、時々さしはさむ笑話の部分もすべて切り捨てられ、「可笑記」が持つ豊かな多様性の中から、一面的にまずしい部分を取り出して強調するだけになってしまうであろう。しかも、このような例は、仮名草子の場合決して少なくはない。

私は今、分類によって仮名草子が理解出来たと錯覚することは、作品理解のための手段であったものが自己目的化することであり、その分類が逆に作品を規定することによって正しい作品の理解を妨げるといった皮肉な結果にもなりかねないと考える。今更云うまでもなく、仮名草子

研究において、又他の近世小説研究においても、十分な作品論が行なわれることなく分類が先行し、逆に作品論を規定するといった状況が許されてならないのは、自明のことであるはずである。私は、体系を志向する巨視的な又文学史的な把握と同時に、それに安易に規定されず、個々の作品を正しくより豊かに理解して行こうとする基礎作業的な作品論が、現在、特に必要だと考える。

寛文初年刊といわれる<sup>(註2)</sup>「浮世物語」は、これまで仮名草子の体系的な分類を行なおうとして来た研究者たちをとまどわせて来た作品の一つであったと思われる。分類の体系を作りあげ、いざその体系の中に「浮世物語」を置こうとする時、それが持つ多面的な要素のうちから一つを取り出して強調しなければ、体系の中には収まらないということになったのである。分類を行なう前にどのようなためらいが研究者たちにあったかは解らぬが、重友毅氏によって「その構想について見ると、諸国遍歴中の失策は『竹斎』から、大名相手の諫言は『伊曾保物語』から、また当代武士気質への諷諭は『可笑記』から、それぞれ学んできており、要するにすぎはぎのものにすぎないが、それだけに仮名草子の一般的傾向をまとめて見せたという意味で、便利な点もある<sup>(註3)</sup>」と評された「浮世物語」は、「仮名草子の一般的傾向をまとめて見せた」が故に、以下で述べるようないろいろのレッテルがはられることになったのであった。

まず、最も一般的なのは、「徳川文芸類聚」第二巻で「教訓小説」の名のもとに翻刻した朝倉無声氏や、同様に呼ぶ「浅井了意」の北条秀雄

氏、「教化的のもの」という類原退蔵氏<sup>(註4)</sup>、「教訓的作品群」に分類する  
暉峻康隆氏<sup>(註5)</sup>などであり、「浮世物語」にある教訓的要素を作品の主軸と  
見た分類の仕方である。又、野田寿雄氏の詳細な分類表<sup>(註6)</sup>では、「浮世物  
語」は「実用本位、見聞記的なもの」として分類されており、前田金五  
郎氏<sup>(註7)</sup>もそれに従っておられる。さらに、中村幸彦氏<sup>(註8)</sup>は、「徒然草」風の  
随筆」の系統に属するものとして分類<sup>(註9)</sup>されている。

現在行なわれている「浮世物語」の分類は一応以上の三系統になると  
思われるが、これを見ると、仮名草子の個々の作品が持つ諸傾向を総合  
して成立している「浮世物語」のような作品の場合、研究者の視点の置  
き方でどのような分類出来るということになる。云い変えれば、作  
者である了意が総合しようとしたものを分解してとりたてる、以上のよ  
うな分類による規定の仕方は、そのどれをとるにしても、作品全体を理  
解する上でほとんど有効性を持ちえないことになるであろう。従  
って、今の私には、これらの分類のどれが最も正しいかということを開  
題にする必要はないと思われる。むしろここでは、「つぎはぎ」(前出  
重友氏の評言)であるかどうかは後の問題として、研究者たちにすでに  
認められている以上のような諸要素が「浮世物語」に存在しているとい  
うこと、逆に云えば、作者了意が雑多な性格を持つ諸要素の総合化を意  
図して作品を書こうとしたということの方が重要な問題となる。

「浮世物語」が、了意にとって意欲的な作品であったことに間違いは  
ないであろう。そこには、仮名草子がそれまでに持っていた多くの要素

を、浮世房という主人公を造型することによってとり込み、読者により  
興味深い作品を提供しようとした了意の意図が明確に感じとられる。具  
体的な問題で云えば、すでに触れた分類の中でとり立てられている教訓  
的な要素も、実用的な見聞記の要素も随筆的な要素もとり込まれている  
し、さらに云えば、読者に知識を与えようとする啓蒙的な要素<sup>(註10)</sup>も、読者  
に笑を提供しようとする娯楽的な要素<sup>(註11)</sup>も、松田修氏の強調される社会批  
判的な要素<sup>(註12)</sup>も、かなり重要な要因としてとり入れられている。いわば、  
仮名草子の特色を部類分けする時に何時も云われる、実用性、啓蒙・教  
訓性、娯楽性のすべてが明らかに存在しているのである。もちろん、そ  
れらの要素が現象的に存在すること、それを了意がどのような意識や  
意図でとりあげつつ作品を構成しようとしているかは別の問題であり、  
当然後の重要な問題となるが、「浮世物語」を書こうとする時点で、了  
意のこのような総合化の意欲があることを見定めることは、了意におけ  
る「浮世物語」の位置を確定する上でも重要なことである。

仮名草子作者の中でも唯一人の多作家である了意の仮名草子類は、  
著作年譜<sup>(註14)</sup>を見れば明らかのように、万治・寛文期に集中している。それ  
も、寛文六、七年までのおよそ十年間に、仮名草子作者了意の主要な活  
動は終始していると云えるであろう。

云うまでもないことながら、万治・寛文という時期は、すでに戦乱の  
記憶も乱世としての自覚もうすれ、上方町人たちが中心となった商業資  
本主義が勃興しつつある時であり、文化史的に見れば、整版の時代とな  
り出版企業も徐々に企業として確立しつつある時期である。そのような

時期に、仮名草子作者中唯一の非素人的作家<sup>(註15)</sup>であった了意は活動を続ける訳であるが、了意の作品中でも娯楽的色彩に富む「浮世物語」は、彼の非素人作者としての積極的な意欲と姿勢を最も明確に反映しつつ登場することになったと考えて良い。

もっとも「浮世物語」の初版が何時刊行されたかは、現在までの所では判然としていない。しかし、「浮世物語」に、了意のすでに述べた総合化の意欲を見定めるとすれば、「可笑記評判」(万治三刊)「東海道名所記」(万治初成)「江戸名所記」(寛文二刊)「安倍清明物語」(寛文二刊)など、「浮世物語」に総合される要素を個別に持つ作品を書いた後の了意の意欲的な出発にその成立の時点を定めるのが妥当であろう。従って私は、内部徴証によって寛文四年以前の成立を否定される前田金五郎氏の考証<sup>(註16)</sup>を反論する資料を持ってない現在、寛文五年成立を首肯する以外にはない。<sup>(註17)</sup>

寛文五年頃、それ以前の仮名草子の持つ多面的な要素を総合的にとり込もうとする、意欲的な了意の意図を実現すべく「浮世物語」は書かれる。しかし、云うまでもなく、了意は「浮世物語」の中に多くの要素をばくせんと羅列的にとり込もうとしている訳ではない。総合化しようとする意図の中には、当然のことながら、総合することによって実現しようとする何らかの目的があり、その目的のために了意の意図は生かされなければならないはずである。

では、「浮世物語」において了意は、何のためにそのような意図を持

ったのだろうか。——答は余りにも簡単であるかに見える。それは、すでに云われているように、浪人作家了意の現実に対する批判を表白するためであり、主軸はそこに置かれ、多くの教訓的・啓蒙的・批判的な要素がそのために動員されているという答につながるであろう。しかし、浪人し、「陸沈潦倒」<sup>(註19)</sup>した作家了意の目的だけで答を出す訳にはいかない。その目的が了意の内面において大きな部分を占めていたことは十分認めなければならないにしても、同時に、すでに非素人的であった作家了意に、読者に笑を提示しようとする目的があり、「浮世物語」に明確な読者意識があることを忘れる訳にはいかない。むしろ了意は、「浮世物語」を何とか面白い作品とするために努力を集中していると云った方が正確であり、作品を一読すれば明らかのように、仮名草子の多くの要素がそのために動員されることになるのである。

了意は今、批判という目的と読者に笑を提示しようという目的とを持って、仮名草子の持つほとんどすべての要素を総合的にとり入れつつ「浮世物語」を書いて行こうとする。その具体的な様相はこれから検証して行かなければならない訳だが、この二つの目的が最もうまく生かされる小説の型は諷刺小説ということになるであろう。しかし、「浮世物語」を諷刺小説と評することは出来ないし、現在までされてもいない。<sup>(註20)</sup>とすれば、了意はこの二つの目的を生かそうとしてどのような方法をとる、どのように「浮世物語」を構成したのだろうか。あるいは、そのような構成をとるために、了意はどのような論理を持っていたのだろうか。そして、その論理と構成とは「浮世物語」にどのように働きかけ、

それをどのような位相を持った作品にしたのだろうか。——「浮世物語」を対象にする以上、問題は数多いが、ここにかかげたようないくつかの問題を視野に入れつつ、「浮世物語」の持つ論理と構成という点からこの作品の位相を明らかにしてみようというのが、本稿のささやかな意図である。

## 「二」 論理について

「浮世物語」は、中世的藝世から近世的浮世への意義転換を明確に行なったと一般には高く評価されている<sup>(註21)</sup>。「浮世といふ事」の有名な一章から始まる。余りにも周知のものであり引用がはばかれるくらいであるが、「浮世物語」を問題にする以上、まずこの序文的な一章をとりあげない訳にはいかない。

それは、対話という型で一応書かれており、前者の言を後者が否定するという構成をとっている。まず前者はいう。

「今は昔、国風の哥に、『いな物ぢや、心は我がものなれど、まゝにならぬは』と、高きも賤しきも、男も女も、老たるも若きも、皆歌ひ侍べる。『思ふ事叶はねばこそ浮世なれ』といふ歌も侍べり。

万につけて心に叶はず、ままにならねばこそ浮世とは言ふれ。沓<sup>くわ</sup>を隔て、<sup>あなうら</sup>跟を搔とかや。痒き所に手の届かぬ如く、当るやうにしてゆきたらず。沈気なものにて、我ながら身も心も我が儘にならで、いな物なり。まして世の中の事、一つも我が気に叶ふ事無し。さればこそ浮世なれと言へば<sup>(古典大系「仮名草子集」より引用。以下も同じ。)</sup>

この稚拙な文体による浮世についての解釈は、やはり歌を二つとりあ

げ、それを解説するという型で書かれており、同じ様なことを何度くり返したり云い変えたりしているが、中心になっているのは、「万につけて心に叶はずままにならねばこそ浮世」、「世の中の事、一つも我が気に叶ふ事無し。さればこそ浮世」というリフレインであることは云うまでもあるまい。結局、世の中のことは心にならずままにならぬものだ、という、論者の世の中又は現実に対する認識<sup>(註22)</sup>を述べているだけだということになるであろう。云い変えれば、この「浮世」についての考え方には、現実をどのように認識するかに対する答はあっても、そこで認識した現実はどう対処するかという問題は、立てられてもいないし答えられてもいない。ということは、これを単純に「中世的な厭世思想<sup>(註23)</sup>」と呼ぶのは正確ではない、ということでもあるが、ここでは、了意が否定さるべきものとして出している「浮世」についての一つの解釈が、単に世の中又は現実が心にならずままにならないという認識<sup>(註24)</sup>を表白しているだけだという事実には、注目しておく必要があるようである。

前者の以上のような言に対して、後者は、「いやその義理ではない。」と強く否定して次のように述べる。

「世に住めば、なにはにつけて善悪を見聞く事、皆面白く、一寸先は聞なり。なんの絲瓜の皮、思ひ置きは腹の病、当座くんにやらして、月・雪・花・紅葉にうち向ひ、歌を歌ひ、酒飲み、浮に浮いて慰み、手前の摺切も苦にならず。沈み入らぬ心立の水に流るゝ瓢箪の如くなる、これを浮世と名づくるなりと言へるを、<sup>(註24)</sup>それ者<sup>(註24)</sup>は聞て、誠にそれく感じけり。」

「いやその義理ではない」と前者を否定して自己の見解を述べる後者の言に、「それ者」<sup>(註25)</sup>が「それく」と感じたと書く意は、前者の言を決定的に否定したつもりであろう。と同時に、この気負った後者の言に説得力を認めればこそ、従来この序章が一つの画期的な意義を持つと評価されて来たのもあろう。しかし、後者の言は、本当に前者の言を否定しえているのであろうか。了意は否定したつもりでも、この後者の論理においては、前者の論点を移動させることで自己の論理を押し通そうとする、微妙な論点のスリカエが行なわれてはいないだろうか。

すでに触れたように、前者には、ままにならぬ世の中を「浮世」と考えるという、現実に対する論者の認識が語られているだけであった。ここでは、そのような現実又は世の中にどのような姿勢で立ち向うべきかが問題になってはいない。従って、前者の論理を決定的に否定するためには、まず、前者の「ままにならぬ」のが「浮世」だという認識を否定し打ち破らねばならないはずである。ところが、後者は、前者の認識を否定しようとしないうちか、むしろその認識を肯定しつつ、ただそのように認識した浮世にどう処すべきかを述べているだけのようなのである。結論が先になった感じだが、その点をより具体的に問題にしてみよう。

後者がその言説の中で世の中又は現実をどのようなものと考えているかは、前者において程具体的には語られていない。しいてあげれば、「世に住めば、なにはにつけて善悪を見聞く事、皆面白く、一寸先は闇なり」が、最も具体性を持っていることになる。が、云うまでもなくこ

こには、「浮世」がままになるという認識はない。確かに、「善悪を見聞く事」が面白いと云ってはいるが、それは「見聞く」という、自己が現実にかかわらぬ範囲で現実に面白さを感じるというだけであり、現実に対する認識の中心は、「一寸先は闇」つまり、どうなるか解らぬということであろう。いわば、後者のかわりあわねばならぬ現実も「一寸先は闇」なのであり、ままになるものではない。さらに、後者の現実に対する認識を推定させる言説をさぐれば、「思ひ置きは腹の病」に見られるごとく、現実又は世の中には「思ひ置き」が多くままならぬということであり、「浮に浮いて慰み、手前の摺切も……」に見られるように、享樂的な生活をすれば、無一物・素寒貧の「摺切」になるということであろう。いづれにしても、前者を決定的に否定しようとする後者の論理が前提におく現実への認識は、世の中はままならぬという前者の認識と同一の次元に立っているのである。

従って、後者の論理は、前者と同一の平面に立って展開されることになる。そして、そのような認識のもとで、世の中や現実はどう対処するかという方法の問題へと論点を移行させるのである。が、すでに引用文を見れば明らかのように、「一寸先は闇」であり「思ひ置き」の多い現実に対処しようとする時の後者の論理は、ままならぬ現実にたちむかいそれを変革するためにそれとかかわり合うのではなく、むしろ、それを忘れるための方法論の提示に終始する。すなわち、刹那主義的に「当座くく」にやらし、具体的には「月・雪・花・紅葉にうち向ひ、歌を歌ひ、酒飲み、浮に浮いて慰」むという、現実から逃避するための方法を

打ち出すのである。さらに、そのような逃避が「手前の摺切」につながるといふ認識を持ちつつも、それも「苦にならず、沈み入らぬ心立」を持つということによって、現実能耐えしのぶことでそれにかかわり合おうとする精神構造を持つことを拒否し、現実をはるか彼方に自己とは関係のないものとして去ってしまう、結局、現実とかかわり合ふ方法論の提示により、後者の論理をささえる利那的な享楽思想は、ここで自足的に完結することになるのである。

前者の論理を決定的に否定しようとした後者の論理は、前者の認識を確定したものとして受け入れつつ、前者が問題にしようとはしていない方法の問題に論点をすりかえることで否定しようとしただけであった。それは論争の過程で行なわれる巧妙な作戦の一つにすぎないが、ここで問題なのは、それが了意自身の自問自答として行なわれ、了意が後者の論理に、簡単に軍配をあげてしまったことである。確かにこの場合了意は、ままたらぬ浮世という認識を、享楽思想を対決させることにより否定しているつもりではある。しかし、ままたらぬ浮世という前者の認識の上への、浮世という現実にかかわり合ふ所で行なわれる享楽という方法の提示が、前者を否定したことになるのはすでに明らかである。つまり、ここで了意は、前者の認識から生まれる多くの方法の可能性の中から、現実を避けて通りそれにかかわるまいとする方法をひき出しているだけであり、それが具体的には「月・雪・花・紅葉のうち向」うことであるとすれば、ここに「中世的な厭世思想を払いのけ

て、いつのまにか現世中心の享楽主義を確立するに至った、近世人の面目を見ることができ(註26)る」という通説的な評価を行なうことは出来ない。むしろ、この序章で行なわれる了意の論理は、中世的な享楽主義の文脈の中にある論理であるにすぎず、「支那の市隠が然る如く、わが隠遁者にも、すでに形づくられた人生観であった」とする山口剛氏の評価(註27)が、最も正確であったということになるであろう。

しかし、ままたらぬ浮世という認識を既定のものとして動かそうとすることなく、現実とかかわり合うことを避ける方法を提示するだけのこの「浮世物語」序章の論理構造は、了意において自覚的であったか否かは別問題として、「浮世物語」という作品自体に内部的な連関を持つことになる。すでに述べたように了意は、明確な読者意識を持ちつつ読者に笑を提供しようとする目的と現実批判・社会批判という目的とを持ちつつ仮名草子の諸要素を総合しようと「浮世物語」で意図していたと思われるが、これらの目的や意図と序章の論理とは、微妙にかかわり合いつつ作品を展開させて行く。すなわち、序章の論理をうけつぎ、読者に笑を提供するための手段として主人公が造型される時、それは、現実の前での敗北を常に前提している人物、しかも、その敗北に自らを対決させるのではなく、「沈み入らぬ心立」を持つことによってそれを何とかすりぬけて行こうとするだけの人物「浮世房」として、設定されることになるであろう。一方、序章の論理を基軸とする現実批判・社会批判は、当然ストレートな型でのものとはなり得ず、その現実や社会への決

定的な対決を含むものではあり得なくなるであろう。が、いづれにしても意は、これまで分折して来た論理を序章として提出する以上、それを「浮世物語」の前提として生かさなければならぬ。だが、その中途半端なあいまいさを多分に持つ了意の論理が「浮世物語」の構成を支える時、そこに矛盾を生じ分裂をひき起こすことにならないのかどうか、又、そのような構成の仕方が作品自身の性格にどのような影響を及ぼすことになるのか——「浮世物語」の構成の問題が、当然次の問題とならざるを得ない。

### 〔三〕 構成について

「浮世物語」において、了意は一応主人公浮世房の一代記という全体的な構成を、不十分ながらとってはいる。しかし、その構成は、後にふれるようにいささか工夫されている部分がない訳ではないとは云っても、作品全体の統一をはかろうとしてとられているだけの便宜的な形式と評すことが出来るであろう。従って、ここで問題にしようとする構成とは、すでに述べた目的や意図を持ちつつ、了意がどのように各章を作りあげているかということであり、むしろ作品の内部的な構成の問題が中心となる。

主人公浮世房は、巻一の二において、滑稽的な人物の典型として戯画化されて登場する。<sup>(註28)</sup> その紹介は、「俗姓は、幼き時より鼻垂れければ、藤氏の末孫なりとも言ふ……」に始り、腰抜け武士のため町人になった男の子供として生れ、「胎毒深き子なりければ、頭には甲瘡といふもの

針かづきの如くになりて、目の際迄爛れ」たり、疝の虫その他をわずらったりしつともどうか成長したが、親のならわせようとした居合・柔・兵法・手習などの「芸能の方は殊に不器用」で、親の死後は「身持我儘になりて、足を空になし、小鳥を落し、魚を釣りて、此処彼処遊びさまよふ浮れ者」になったという風に、読者をただ笑わせるための、全く同情・共感に値しない人物として造型される。そして以下、「心も進まぬ道心を発し」(巻一の八)て法体して浮世房となり、藪医として失敗したり大工の弟子になって馬鹿にされたりする巻二の三までの主人公は、徹底的に戯画化され、読者はその失敗を笑っていれば良いということになる。

しかし、了意は、「浮世物語」で読者の笑だけを求めている訳ではない。彼はその作品の中に、啓蒙的な要素も教訓的な要素も、その現実批判・社会批判の目的に支えられてとり込もうとする。その一つ一つを作品から分解しつとりたてて分折することは容易だが、今問題にしなればならないのは、そのような徹底的に戯画化された主人公を造型しつつ、浮世への批判という目的を生かさそうとする時の構成の問題である。

当然のことながら、了意は、読者に笑を提供する徹底的に戯画化された主人公が、真面目な教訓や社会批判を行なうという構成をとることは出来ず、地の文又は主人公以外の人物がそれを行なうといった構成をとることになる。その代表的な一例として巻一の五、六をとりあげてみると、まず傾城についての啓蒙的な知識を提供した後、それに溺れる主人公を戒める人物(宿老)が登場し、了意の教訓的な意図を体するが如く



長々と「異見」を加えるが、主人公は「『かゝる仰こそ有難けれ。今よりは不通と参るまじ』とて、ことごとくしく誓文を立て、宿老をば帰りつつ、その足にて嶋原に行きけるが、終には皆叩き上げて、かのてつるてんの摺切とこそ成にけれ」ということになる。つまりここでは、作者の意を体した教訓を主人公がくずす、という構成がとられているのである。

もちろん、ここに作者了意の読者に笑を求めようとする目的意識を見ることが容易であり、同時に、「浮に浮いて慰み、手前の摺切も苦にならず沈みいらぬ心立」を持つという序章の論理が具体化されていることも間違いないであろう。さらにここでは、序章の論理にあった中途半端な感じが拡大していることにも注目する必要があるだろう。すなわち、主人公が常識的な教訓に対決することなくそれを認め、それから逃避するという構成によって問題をそらしてしまっているのである。従って、ここでとられる主人公の教訓への態度は、問題と対決することなくそらして受け取るという点でも、皮肉なことに序章の論理を受けついでいると云わねばならない。

しかし、このような構成をとることによって了意は、それまで長々と書きつづつて来た教訓に反逆する主人公を設定し、主人公を常識への逆者に仕立てようとして意識していたと云えるだろうか。確かに我々近代の読者にとって、常識的な教訓に反逆する主人公、というとらえ方は魅力的であるが、すでに見て来たように、これまで主人公が徹底的に戯画化された最低の人物として書かれていることは疑いないし、以後巻二の三

までの主人公は、悪徳役人になって人々からのろわれたり（巻一の七）、律義な侍に喧嘩をしかけてさんざんな目にあったり（巻一の九）し、主人公を読者の同情共感に価する人物に仕立てようとする了意の意図は全く見あたらないと云えよう。ところが、それとは逆に、今問題にしている遊興への戒を始め、博奕への戒なども、啓蒙的な了意の情熱を反映してすこぶる真面目に書かれており、それらの言辞に、常識的な教訓を戯作化する了意の意図を見ることはとても出来ないであろう。結局、巻一の二から巻二の三の構成において時に行なわれる主人公の教訓への反逆に、常識への反逆という了意の意図を見ることは不可能であり、この構成は、了意が読者に笑を提供するための一つの手段にすぎないということになるのである。

が、結果はそのようになっているとしても、以上のような構成をとることによって、笑と教訓とを何とか総合しようとした了意の意図は、意欲的であったと評価することは出来るかもしれない。何故なら、仮名草子の段階で云えば、このような構成による戯作性の拡大が、新しい飛躍を準備する可能性を持っていたことを疑うことは出来ないからである。

しかし、このような構成によって戯作性を拡大しつつ批判の目的を同時に生かそうとすることは、了意において大きな矛盾を生むことになったのではなからうか。すなわち、常識的な教訓の正しさを信じて長々と説教しつつ、笑を提供するための最低の主人公に、その教訓と対決させる、ことなくそれをくずさしてしまうとすれば、読者は主人公を笑うだけで、教訓や批判は了意がねらった程の説得力を当然持たなくなるであらう。

う。と同時に、このような構成をとることによって主人公が作者の真面目な教訓とほとんどかわり合おうとしない以上、教訓と笑とは併存するだけであり、小説の構成としてもはや無意味な形骸と化してしまわざるをえないはずである。いづれにしても了意は、巻二の三までの構成によってその目的や意図を十分実現することは出来ず、それが意識的であったか否かは別として、これまで続けて来た構成を変えざるをえなかったようである。

巻二の四以後、「浮世物語」の構成は変質する。もちろん私は、それが了意において意識的に行なわれたと確言することは出来ない。それは、巻二の四において、突然浮世房が積極的な批判者として登場するにもかかわらず、そのような批判を行ないうる者へと成長する過程が全く描かれていないことと関連する。仮に、浮世房が、浮れ歩く過程で現実と対決しつつ成長するという描き方をされていれば、巻二の四以後の変質は、了意の意図的な構成の変質と了解しうるかもしれない。しかし、すでに述べたように、対決の論理を持たない浮世房は、何時も了意の批判的な言辞にかかわりあうことなく浮れ歩くだけであり、そこに、浮世房を変質させるためのモメントはない。結局了意は、浮世房の変質を十分に読者に納得させることなく、まさに突然に、戯画化された主人公が了意自身の思考を直接反映する批判者として啓蒙・教訓・批判を行なうという構成に切り変えるのである。

しかし、浮世房という統一した人格を創出しようとする意図を持たな

かったと考えられる了意にしても、構成を変えると同時に、戯画化された浮世房を突然真面目な主人公に変質させることは出来ない。それ故、戯画化された最低の人物が了意のいづく真面目な批判・教訓を行なうという矛盾した構成がとられる巻二の四から巻三の二までは、了意の仮名草子総合化の意図が分解する過程を示す過渡的な状態になってしまっただけのようである。

巻二の四で浮世房は、米の値段が高いこと及びその原因として買占めが行なわれていることなどを、長々と又痛烈に批判する。その批判は正当であり、「可笑記」をうけつぐ了意の批判意識を最も明瞭に示していると云えるであろう。だが、その浮世房の批判は、「問屋の亭主これを聞て、『米高くして喜ぶ者も世に多し。けしからぬ法師の涙かな。米が欲しさに啼かるゝものであろう』とて、一舛ばかり取らせて帰しけり」という型でくずされ、相対化・戯作化されることになる。それは、浮世房がすでに述べたような最低の人物として設定されているかぎり当然行なわれなければならない相対化であり、読者はここで笑うことになるであろう。しかし、この場合問題なのは、浮世房の真正直な批判が滑稽化されることを了意が期待している訳ではなく、戯画化された浮世房と彼の批判とは別の次元のものでなければならぬことである。云い換えれば、この場合のように、正当な批判を軽蔑さるべき主人公に行なわせるという構成を了意がとろうとする時、その批判が了意にとって正しいものであればある程、批判の目的と笑を提供する目的とは分解してしまうことになるだけである。その時読者は、正当な批判を主人公浮世房の発

想とは別のものとして受け入れ、浮世房を滑稽な主人公として笑の対象とするはずである。確かにこの構成をとれば、了意の批判的言辞が笑の中に解消されることは少ないが、逆に笑の中に解消されないことによつて「浮世物語」は、小説としての分解を始めるのである。

巻二の五以後、主人公がただ滑稽をつくすという趣向で物語は展開し、浮世房はなお、笑を提供する人物として描かれる。が、巻二の九「後悔の事」で後悔して以後の浮世房は、自らが滑稽な行動をすることをやめ、ほとんど説教者・批判者・笑話の語り手ということになってしまふ。もちろんここでも、了意が「浮世物語」全体の構成を考えつつ主人公に後悔させ、その人物像を変化させたというのは難かしいかもしれない。しかし、ある程度まで意識的にこの章が書かれていることは、それ以後の浮世房が軽蔑の対象とはならず、むしろその言説を世人に受け入れられるようになることからもうかがわれるであろう。確かに、現在の我々の立場から見れば、浮世房は、一つの人格として作家の強い興味の対象とされてはならず便宜的な人物としてとりあげられているにすぎないが、了意自身としては、ここで浮世房の成長を確認したつもりなのかもしれない。

が、それでもなお、巻三の二までは、滑稽な主人公の行為を笑わせ、浮世房の批判を相対化することによってくすくすとする構成は持続される。しかし、批判の相対化・戯作化という構成は章をおって少しずつ弱くなり、巻三の二では、浮世房が侍の善悪を批判した長口舌の後「人々げにもと言ふもあり。何を捨房主めが口に任せて囁るやらんと、嘲る者

も有りけり」という相対化が行なわれるにすぎない。今これをすでに引用した巻二の四と比較した時、批判の相対化・戯作化という構成が非常に弱くなっていることは明らかであろう。結局、以上のような経過をたどりつつ、巻三の二までにおいて、了意の笑を提供しようとする目的と現実批判・社会批判を行なおうとする目的とは、徐々に別々のものとなり、ある章では主人公の行為による笑話化が中心となり、ある章では真面目な口ぶりによる浮世房の批判が中心となるというように、「浮世物語」の分解の過程はますます進行して行くことになるのである。

了意は、巻二の四から巻三の二において、以上のような分解の過程を経ながらであっても、滑稽な主人公に真面目な批判を行なわせ、その批判を相対化・戯作化することによって笑を提供しようとする構成をとった。しかしそれは、巻一の二から巻二の三までにおいてとられた構成にくらべて、了意の目的をより良く実現するものでありえたであろうか。もちろん、ここで私は、主人公が統一した人間として描かれず分裂しているという全体の構成上の不備を問題にしている訳ではない。問題なのは、現実と対決する論理を拒否する所から構想された主人公が、突然、了意の現実批判の目的になわせられる時、最初の主人公のイメージを生かすことによって笑を提供しようとする程、主人公が行う批判は相対化・戯作化されざるをえないはずであり、その批判の説得力を弱めるという、了意にとって矛盾した事態になってしまふということである。従って、浮世房に行なわせる批判を信じて説得力を持たせようとする

る了意の立場から云えば、軽蔑さるべき主人公としての浮世房のイメージを徐々に縮少して変質させ、浮世房の行為が笑を生むという構成を完全に変えなければならぬということになる。結局、浮世房の変質を過渡的に示すことになった巻二の四から巻三の二においてとられる構成の仕方では、又しても了意の目的を不十分にしか実現出来ないということになるのである。

しかし、浮世房が、ほぼ完全に変質して、滑稽な人物としての行為をやめ、大名のお咄の衆として、現実批判を行ないつつ大名や諸侍を「甘心」させたり、笑話を語って笑わせたりする巻三の三以後、了意の目的は実現されたと云えるだろうか。確かに、そのような構成をとることにより了意は、ある章では自分の持つ現実批判・社会批判を相対化することなく十分に投げ出して読者に伝えることが出来るであろう。しかし了意は、自己の意見を生真面目な浮世房に託しさえすれば良いという構成に浮世物語を切り変えた時、最初に持っていた読者への笑の提供というもう一つの目的を実現することが出来なくなる。少くとも、現実への現象的な批判や現実への順応(註29)を説く主人公は笑の対象とはならない。時に、彼が余り上手とは云えない狂歌をよむことがあっても、その笑は十分なものであるであろう。その時了意は、笑の提供のために、浮世房自身に自らの行為とはかわりのない笑話を語らせた章を併列するという余りにも便宜的な手段をとる。だが、了意のこのやり方を目して、その意図や目的が実現されていると評することは出来ないであろう。むしろそ

うなった時、了意の目的は各章ごとに全く別々のものとして併存するだけとなり、ある章では批判を、ある章では笑話を、という風に、小説としての見事な空中分解をとげて、まさに「つぎはぎ」という批判に甘んじなければならぬようなものとなってしまっているのである。

だが、一読すれば明らかなその事実を、今ことごとしく例証する必要はあるまい。ここではただ、以上のような過程を経ることによって、了意における仮名草子総合化の意図が分解してしまい、了意の積極的な意欲にもかかわらず「浮世物語」はみじめな失敗作となってしまった、と結論しておけばよいであろう。しかし、そのような現象の指摘だけでは、現実に対決することを拒否する論理を持った主人公が、現実にかかわろうとする主人公に変質させられた時、何故「浮世物語」は空中分解をとげたのかという問題が未解決のままに残ってしまうであろう。私はその問題を考えるために、再び、主人公を変質させた後の「浮世物語」の論理を検討してみなければならぬ。

#### 〔四〕再び論理について

序章で説かれた、現実にかかわることを拒否する論理から生まれた浮世房は、最低の軽蔑さるべき人物として形象され、その行為は笑の対象となればよかった訳だが、巻二の四以後、批判者として現実にかかわろうとする以上、序章の論理を継続することは不可能になり、当然、浮世房は、序章の論理を否定する人物とならなければならないはずである。そして、構成の上では、巻二の四から巻三の二の過渡的な段階を経て、浮世房は、序章の論理とは逆に、ままたらぬ浮世に対する批判者として

浮世にかかわろうとする。しかし、浮世房が生真面目な批判者となって序章の論理をうけつがなくなった時、彼は序章の論理を否定するどのような論理を持つことになるのだろうか。批判者としての浮世房の論理は、序章の論理を克服しえた所から生まれていると云えるのだろうか。云うまでもなくこの問題は、浮世房の批判における現実とのかかわり方と密接な関連を持つことになる。

当然のことながら、批判者浮世房は、自らの行為において現実とかわる訳ではなく、批判すべき現実を自己の行為によって否定しようとはしない。従ってそこには、批判を行動化しようとする論理はない。すでに触れた巻二の四の米の買占めについての批判にも見られるように、浮世房の批判は、彼が一舂の米を恵まれることによって相対化され、批判のための批判に終始してしまうだけである。さらに、大名のお咄の衆になつて以後の浮世房の批判は、すでにそのような設定自体からもうかがわれるように、主として家臣たちの墮落を批判しそれを大名が「甘心」して聞くという型になる訳だから、その批判は、大名を頂点として構成される封建社会の現実に対決することから生まれる批判ではありえない。むしろ、現実をそのまま認めてそれへの順応を説くことの方が中心となり、特に巻四、五においては、儒教の俗解的な教訓を行なうことが目的であるかのごとくで、もはや批判とも呼べないようなものとなる。そして、「一日も片時も、大恩を与へ給ふ主君の御事、仮初にも謗り奉る事大なる過なり。謗らんよりは隙を申てその許を立退くべし。隙を与へられずは、心を尽して奉公忠節を勤むべし。それにも主君の心に叶は

ずは、天命弱しと知るべし。己を顧みて過を思ひなば、世をも人も恨むる事有るまじ。然らば長く災を遠ざかり、安楽活計の身たるべし。よく此事を思ひ謀るべし」(巻五の六)と云う風に、教訓とも諦めともつかぬ、体制への順応を強調するのである。

以上のように見てくると、結局、浮世房の批判における現実とのかかわり方は、あくまでも現実と対決する姿勢を持たずそれに順応することを中心としており、仮に現実から拒否された場合にも、それと対決することなく逃避するという構造を持っていると云わなければならないであろう。云い変えれば、序章で主張された現実から逃避するための論理とここに見られる現実順応の論理とは、ともに現実に対決しないという姿勢をとることで結びついてしまっているのである。——ここにおいて、批判者浮世房が、序章の論理を克服しえていないのは云うまでもあるまい。従つて、このような論理しか批判者浮世房が持てない以上、了意がたとえ構成の上で浮世房を変質させてみても、現実には常に批判者浮世房の手からすり抜けてしまうことになるはずである。その時、「浮世物語」の小説としての分解と退廃は、単に現象的な面をこえて、もはや決定的なものとなる。

しかし、浮世と対決する論理を主人公が持たない「浮世物語」とは、一体何だろうか。それは、主人公あるいは作者と、現実との緊張関係がないという退廃を意味しているにすぎないのではないだろうか。「浮世物語」後半に生じた教訓と笑話との空中分解は、了意の仮名草子総合化の意図の空中分解であると同時に、了意という作家の現実にかかわろう

とする論理の甘さと理念の固定化とを明確に露呈しているのではないだろうか。

了意は、確かに、現象的には浮世房に現実の問題を語らせようとして来た。しかし、現実と対決して緊張関係を持つことなく現実を批判するということは、論理を構成する理念の固定化をうながすだけである。云い変えれば、了意にとってあくまで正しい理念は、常に現実と矛盾することも敵対関係を持つこともなく、ましてや現実によってくずされるということなどはないということになる。すなわち、浮世と対決する論理を持たない「浮世物語」は、真の意味で浮世とかかわり合う必要もないし、かかわり合うことも出来ないのである。何故なら、そこには、ままたらぬ浮世に対決することなく逃避する論理と、儒教理念によってままたらぬ浮世を常に正しく、固定的にとらえ、それに順応しようとする論理以外にはなく、その本来対立するはずの二つの論理が、浮世と対決しない姿勢を持つことで了意において矛盾もなく結びついてしまっているだけなのだから……。

——かくして、主人公浮世房は、真の意味で浮世という現実にかかわることなく、小説としてもはや分解してしまった巻四、五を経過し、蛻仙して「行方なく失せ」てしまうことになる。それは、現実への順応をときつつ現実を逃避する了意自身の矛盾を安易にそして見事に、(?) 解消してしまうことでもあった。

#### 〔五〕 残された問題

すでに述べたように、「浮世物語」には、現実逃避の論理と現実順応

の論理しかなく、それらはいずれも、現実と積極的にかかわり対決しようとする論理を欠いていた。そしてそれらは、ともに了意のままならぬ浮世という認識と不可分に結びついているはずであり、本来対立するはずの論理が、ままたらぬ浮世と対決しないことによって了意において両立したのである。云わばそれは、現代のインテリゲンチヤの偽瞞的な自己弁護の論理に最も近似しているということになるが、今ここで確認しておく必要があるのは、そのような論理の上に構成されている以上、「浮世物語」は、積極的に浮世とかかわり合う物語となりえなかったということである。それが仮名草子の限界、と云ってしまうのは簡単だが、浮世草子においてどのようにそれが克服されていると云えるのか、という問題を明らかにしなければ、「浮世物語」を簡単に過渡期の作品と割り切る訳にもいかないであろう。しかし、その問題を解決するためには、浮世草子が単に「浮世物語」を戯作的に拡大して純粋化したとか、主として町人生活に主題を転換したとか云う現象の指摘を行なうだけではなく、その浮世に対する認識やそれにかかわろうとする論理が、如何に、「浮世物語」の認識や論理を克服しているか又はいないか、ということまでも考えない訳にはいかず、本稿の主題と余りにも離れてしまうことになるであろう。従って、ここでは、いくらずい意が仮名草子の諸要素を総合しようとしても、すでに述べたような論理と構成しか持てない以上、「浮世物語」はそれ自身において分解せざるをえなかったのだという事実、云い換えれば、「浮世物語」が何故仮名草子の域を抜け出す要因を持てなかったかという位相を、確認しえたとして筆を置く以外

にはない。もちろん、そのような云い方をする以前に、了意は何故そのような論理しか持つことが出来なかったのか、この了意の論理は、果して真に克服されるのか、あるいは現在されているのか、又、このような了意の論理が、当時どんな意味を持っていたのか、あるいは現在持っているのか、等々、今の私が問題にしなければならないことや問題にしたいことがいくつあるが、「浮世物語」の位相をその論理と構成という視点から見定めることによって不十分ながら作品論を試みようとした本稿の意図を又しても離れることになるであろう。それらの問題については、別稿を期するより仕方がないようである。

(1667・12・26)

註1 すでにこの点についての批判は、中村幸彦氏、松田修氏などの後掲の諸論において行なわれている。ただし私は、後述のように、現在の段階では、分類を行なう以前に、個々の作品をより具体的にとりあげた作品論が必要であると考えるので、当然現在の分類に規制される必要はないと考える。

2 成立については異説もあるが(野田寿雄氏・「浮世物語」覚書・国語国文研究・二四号)後述のように、私は、通説に従ってよいと思う。くわしくは、註16及び註17参照。

3 重友毅氏「日本近世文学史」より引用。

4 岩波講座「日本文学」所収「仮名草子」

5 「元禄文芸復興」その他の論著。氏は「岩波講座日本文学史」の「仮名草子」では、「下降的ジャンル」という分け方もされているが、一応最新のものに従った。なお、「下降的ジャンル」に含められている作品は、ほとんど教訓的作品群のものと同じである。

6 「仮名草子の世界」(「近世小説史論考」所収)

7 日本古典文学大系「仮名草子集」解説。

### 「浮世物語」の論理と構成

8 「仮名草子の説話性」(「近世小説史の研究」所収)

9 以上のどの分類においても、「浮世物語」にある娯楽的な要素を強調したものはないが、その比重は、かなりあり、その点を強調した分類も可能だと思われる。註11参照。

10 教訓や批判に入る前に書かれる一般的な知識や巻五などにみられる儒教の俗解的傾向などは、この要素を明確に示している。

11 最も顕著なのは、浮世房の語も多くの純粹の笑話(巻三〜五にみられる)だが、この要素は、作品全体を貫流していると思う。

12 この点について具体的には、松田修氏が「浮世物語の挫折」(「近世日本文学の成立」)で強調しておられる。

13 「三」構成について、参照。

14 北条秀雄氏「浅井了意」その他参照。

15 この熟さない言葉をここで用いたのは、職業作家という言葉が、作品を書くことで生活する作家の意味に解されるのを恐れたためである。当然のことながら、仮名草子の時代に、了意がかなりの作品を書いている、それで生活出来なかったことは、明らかである。

16 「浮世物語」雑考(国語・国文・昭和四〇年六月号)

17 前田氏の考証により、寛文初年以後の刊であることは動かないと思われるが、寛文五年以前の刊行を否定される二つの証拠は、未だ推定の域を脱していないと思われる。

18 註12の松田氏の論参照。

19 「可笑記評判」序。

20 それは、以下の論述において自ら明らかになると思われるが、「浮世物語」には、笑と批判とが有機的に結びつくモメントが全くないと云えるであらう。

21 頼原退蔵氏「うきよ名義考」(「江戸文芸論考」所収)その他。いわゆる通説として、文学史その他にとり入れられている評価であるが、以下に述べるように、そのような評価を行うことは、了意の論理を不正確にとらえて買いかぶっていることになると思う。

22 序章に引用されている歌謡自体が、中世から近世にかけての利那的享楽

「浮世物語」の論理と構成

思想を背景として生まれた歌謡群の一つであることは注目しておく必要があるかもしれない。結局、序章の後半は、これらの歌謡を支える思想と、へだたりのあるものではない、ということになるであろう。

23 註3に同じ。

24 引用文のうち、「苦にならず」の下の句点は、読点に変えた方がよいと思われるが、ここでは、一応大系本に従った。

25 その道によく通じた人（大系本註）の意であるが、了意は、この人物の賛成の言葉によって、前者の言を決定的に否定したつもりであろう。

26 註3に同じ。

27 「浮世草子名作集」（日本名著全集江戸文芸之部）解説。

28 云うまでもなく、巻一の八までは浮世房は未だ法体しておらず、俗名の瓢太郎が用いられている。

29 この点については後述する。紙数の関係で、後にも詳しく触れていないが、特に四、五においてそれが顕著であると思う。